



喜多川歌麿《吉原仁和嘉 狭江松蔵 峯いと》
Photograph © 2011 Museum of Fine Arts, Boston. All rights reserved.

Topics

大震災に際会して

ボストン美術館浮世絵名品展 錦絵の黄金時代 ― 清長、歌麿、写楽

平成23年度 所蔵作品展 岡本秋暉とその師友

WiCAN 2010-11 アートからはじめる学校プロジェクト

大震災に際して

本年3月11日の東日本大震災では、東北や北関東の沿岸部を中心に、多くの貴重な人命が失われ、建物や家財、思い出の品々などが無惨にも滅失してしまいました。お亡くなりになった方々の御霊が安かれとお祈り申し上げますとともに、被災された方々には衷心よりお見舞いを申し上げます。

千葉市美術館では折しも第42回千葉市民美術展覧会を開催中でしたが、その後の余震も止まない状態が続きましたため、残念ながら会期途中での閉幕を余儀なくされてしまいました。館内各階に市民の皆様の傑作、力作が千点余り展示されていましたが、一部が思わぬ被害を受けてしまいました。関係の皆様には心からお詫び申し上げます。会場にいらした観客の皆様や館員たちは、激しい揺れに恐ろしい思いをしたことでしょうか、一人も怪我をすることがなかったことには、ほっと安堵させられました。

文化庁の発表によりますと、国関連の文化財の被害は合計で295件(3月21日現在)にも上ったとのことで、その中には岡倉天心ゆかりの六角堂(茨城大学五浦美術文化研究所)も含まれているとのことです。津波で建物ごと海に流されてしまったようです。

歴史を振り返ってみても、地震や津波、洪水などの自然災害によって、我が国の文化財や美術品は数多く失われてきたものでした。その悲惨な様相は、江戸時代中期の写生派の画家、円山応挙の「七難七福図巻(難福図巻とも略称)」(1768年作、相国寺承天閣美術館蔵)によって、迫真的に表されています。また同じその図巻には、火災を受けた建物から掛け軸などの貴重な品々を必死に持ち出して逃げる人たちの姿も描かれています。我が国では木造建築がほとんどでしたから、火事による焼失も多かったのです。そのような過酷な運

命に遭いながらも、辛うじて長らえてきたのが、今日私たちを楽しませてくれる文化財であり、古美術品なのです。それらを命がけで守り伝えてくれた先人たちに、改めて感謝の念を深くしています。

幸いなことに、当館の美術倉庫の中に保管されていた館有品や寄託品(外部の団体や個人からお預かりしている品)は、額縁などにわずかな傷を受けたものが二、三あったほか、美術品そのものには実害を受けることがありませんでした。それでも、建物の安全確認に時間がかかり、なお強い余震も続いていますので、4月26日からの「ボストン美術館浮世絵名品展 錦絵の黄金時代」展および「岡本秋暉とその師友」展の開催まで、閉館を余儀なくされています。諸般の事情をご賢察の上、ご寛恕下さいますようお願い申し上げます。

当館のみならず、関東圏から東北地方にかけての公私の美術館・博物館はひとしく、この苦境を乗り越えようと懸命の努力をしているところですよ。かつて或る作家が「美術のない人生は味気なく、むなしい」と、戦争中を思い出しながら書いていたことが、私の胸奥に長くとどまっています。未曾有の災害に際会した今こそ、美しいもの、貴いものを共有する機会を提供させていただく責務が私たちにあるものと、心を新たにしているところです。悲しく、苦しいことがなお続き、重なることと思いますが、明るく元気な日本をふたたび取り戻すべく、皆様と共に努力していく所存ですので、これからもよろしくご指導、ご支援下さいますよう、お願い申し上げます。

[館長 小林 忠]

生のお話を思い出しました。遠藤先生は昭和15年～18年に美術図書の出版社アトリエ社に勤めていらっしゃいましたが、戦局が悪化する状況下で、美術の本は驚くほど売れたのだそうです。生死に関わる厳しい状況の中で、美術が確かに人々の心の支えになっていたということでしょう。結局出版を止めざるをえなかったのは、戦争のため紙などの材料が手に入らなくなったという理由からで、決して需要が少なくなったせいではなかったそうです。

今日日本には、強い悲しみやストレス、不安を感じている方がたくさんいらっしゃると思います。美術館が何をするべきか、やはり不安や疑問もありますが、美術が少しでも元氣のない心を癒してくれることを願って、自分たちの仕事に取り組んでいくしかありません。

さて、本年度当館の企画展第一弾は、「ボストン美術館浮世絵名品展 錦絵の黄金時代—清長、歌麿、写楽」です。東京美術学校(現・東京藝術大学)の創設に深く関わったフェノロサが、初代の日本美



鳥居清長《「子宝五節遊」端午》
寛政6-7(1794-95)年 ボストン美術館



喜多川歌麿《青楼遊君合鏡 若那屋内 若菜和哥浦》寛政9(1797)年頃 ボストン美術館

術部長を勤めたというボストン美術館は、世界有数の日本美術コレクションを所蔵することで知られています。特に浮世絵のコレクションは膨大で、5万点にのぼる版画、7百点以上の肉筆画、数千点の版本が含まれ、現在もお調査整理が続けられており、近年では「浮世絵の正倉院」とさえ通称されています。

ボストン美術館の浮世絵は、19世紀末からビゲローによって収集されたものと、20世紀初めにスポルディング兄弟が収集したコレクションにおよそ大別されます。いずれも質量ともに優れた内容を持っていますが、スポルディング・コレクションは、美術館への寄贈の際の条件として、美術館の外に持ち出すことはもとより、ボストン美術館でも公開展示をしてはならないという条件がついていますので、実際展覧会で見ることはできるのはビゲロー・コレクションが中心になります。

フェノロサは浮世絵をあまり好意的にとらえなかったそうですが、一方でその友人であったビゲローは熱心に浮世絵を集めました。当初は滞在していたパリで、そして1882年には大森貝塚を発見したことでも有名なモースと共に来日して、8年ほど日本に滞在した間にもそのコレクションは充実していったと考えられます。

一方、このような欧米のコレクターの浮世絵に対する熱烈さに対して、西洋式の近代化を優先してきた大方の日本人達は、それが美術であるとも、価値があるものとも認識がなく、無防備なままに大量の浮世絵が海外に流出することになりました。日本人が浮世絵の価値に気付いた時には後の祭り、浮世絵の流出を惜しんでも、有名絵師の作品を国内に買い戻すのは難しい状況になりました。特に18世紀までの優れた作品の多くが、海外に所在しています。我々はもはや、良好な状態で現在まで大切に保存されてきたこと、そして浮世絵が日本美術を代表して海外との橋渡しをしていていることに感謝するべきなのでしょう。

この展覧会では、浮世絵版画の歴史の中でも、最も華やかに錦絵が展開した天明・寛政期(1781-1801)を取り上げ、鳥居清長(1752-1815)、喜多川歌麿(?-1806)、東洲斎写楽の名品を中心に、同時代の浮世絵師の作品を加えた約140点を展示します。近代になって「浮世絵の黄金期」と通称されたこの時代には、錦絵が広く庶

民に普及され、さらに大判の錦絵や、その2枚続、3枚続など、豪華な作品が多く出版されました。また実力のある人気絵師が次々と登場して、主題内容や画風が豊かに展開したのです。

まず黄金期の先陣をきった清長は、天明期、いまだ中判錦絵が多数派であった時代に大判の名品を生み出し、さらにはその続絵を手がけるなど、本格的な大判錦絵の時代を築きました。伸びやかな長身の美人群像は、清長の最も得意とするスタイルで、背景描写などにも写実性が意識され、存在感のある美人画となっています。

次の寛政期を中心に活躍した歌麿は、美人の顔を大きく構成する美人大首絵で人気を博しました。ちょっとした仕草や顔の表情の描写が、女性の心理にまで思い至らせるところが、歌麿の繊細な表現の巧みさです。また後世に「青楼の画家」とも言われた歌麿は、青楼＝吉原遊郭の風俗を細やかに描き出したことでも知られます。

写楽は、寛政6年5月頃から1年もしないうちに筆を折ってしまったらしいことから、現在「謎の絵師」と呼ばれて、ミステリーのように語られる存在ですので、ご興味のある方も多いことでしょう。現代の尺度からすると、誇張されたアクの強い個性的な役者大首絵の表現は魅力的ですが、当時の歌舞伎役者ファンにとっては、美化してくれない、ありがたくない表現であったようです。どうやら出版を続けられるような人気を獲得するには至らずに、短い絵師生命を終えたのです。今回はそのデビュー時の代表作をはじめ、以降の希少な作品が多数展示されます。またスペシャル企画として、ボストン美術館が所蔵する「市川男女蔵の奴一平」の隣に、一平から金を奪う悪役の図で、千葉市美術館が所蔵する「三代目大谷鬼次の江戸兵衛」を展示しますので、この対決の構図に是非注目してみてください。

その他にも役者似顔絵の時代を本格的に築いた勝川春章(1726-92)、旗本から浮世絵師になり歌麿と拮抗した鳥文斎栄之(1756-1829)、役者絵の分野で当時写楽よりも遥かに人気があり、歌川派の繁栄を導いた歌川豊国(1769-1825)といった同時代の絵師達の作品も展示され、展覧会を華やかに彩る予定です。

ボストン美術館の豊かな浮世絵コレクションだからこそ可能な、スター浮世絵師たちによる錦絵の華麗な競演、黄金時代の魅力的な世界を、この機会にお楽しみいただければ幸いです。

[学芸課長 田辺昌子]



東洲斎写楽《三代目大谷鬼次の江戸兵衛》
寛政6(1794)年5月 千葉市美術館



東洲斎写楽《市川男女蔵の奴一平》
寛政6(1794)年5月 ボストン美術館

photographs©2011 Museum of Fine Arts,Boston. All rights reserved

The Golden Age of Color Prints from the Museum of Fine Arts, Ukiyo-e Boston

ボストン美術館浮世絵名品展 錦絵の黄金時代 ―清長、歌麿、写楽

関連企画

■記念講演会（往復葉書による申込制）
「ボストン美術館と浮世絵」
5月7日（土）14:00より（13:30 開場） 11 階講堂にて
講師：小林忠（当館館長 学習院大学教授）
定員：150 名 聴講無料 ＊申込締切 4 月 28 日（木）

「寛政年間浮世絵界絵図」
5月15日（日）14:00より（13:30 開場） 11 階講堂にて
講師：大久保純一（国立歴史民俗博物館教授）
定員：150 名 聴講無料 ＊申込締切 5 月 6 日（金）

■ボストンジャズナイト@レストランかぼちゃわいん（往復葉書による申込制）
ボストン・パークリー音楽院出身のサクソス奏者徳田雄一郎氏（第6回千葉市芸術文化新人賞受賞）率いるメンバーのジャズ演奏を聞きながら、美術館 11 階のレストランでスペシャルディナーをお楽しみください。
＊お 1 人様 2500 円（お食事＋ワンドリンク付）
＊「ボストン美術館浮世絵名品展」入場チケットまたは千葉市美術館友の会会員証の提示が必要です。
6月3日（金）午後 18:00 より（17:30 開場）11 階レストランかぼちゃわいんにて
出演：徳田雄一郎（sax & vo）、山田貴子（piano）、三浦トオル（bass）、長谷川ガク（drums）
定員：30 名程度 ＊申込締切 5 月 23 日（月）

【申込方法】往復葉書に郵便番号、住所、電話番号、氏名、参加希望の企画を明記の上、下記までお送りください。応募多数の場合は抽選となります。（一通につき2名様までお申込可。）
〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8 千葉市美術館 企画係

■音声ガイド
浮世絵コレクターとしても知られる、歌舞伎役者の市川亀治郎さんによる音声ガイドがあります。
ガイド数約 25 点＋亀治郎の浮世絵こぼれ話 貸出料金：500 円

■イブニング・スライド&レクチャー
夜間開館に合わせて担当学芸員が展覧会の見どころを解説します。
4月29日（金）、5月13日（金）、5月27日（金）の 17:00-18:00
9 階講座室にて
講師：田辺昌子（当館学芸課長） ＊内容は各回とも同じです。

■ギャラリートーク
担当学芸員による 4月27日（水） 14:00 より
ボランティアスタッフによる 会期中の毎週水曜日（4月27日を除く）
＊水曜日以外の平日の 14:00 にも開催することがあります。お問い合わせください。

■美ナビー美術館まで “ナビ” ゲート
美術館まで約 15 分の道のりを美術館ボランティアがご案内します。（参加自由）
5月15日（日） 11:00 千葉駅東口出発
＊ボランティアが目印の看板を持ってお待ちしています。

■ワークショップ『江戸を遊ぶ』～プラ板でつくる浮世絵ストラップ
5月5日（木・祝） 14:00 より 11 階講堂にて
先着 20 名 材料費 50 円
＊ 13:00 より 8 階受付にて整理券発行

■美術館ボランティアスタッフによる多色摺ワークショップ「江戸を摺る！」
5月22日（日） 10:30-12:00、13:00-15:00 1 階多目的スペースにて
先着 100 名 参加無料

ボストン美術館浮世絵名品展 錦絵の黄金時代 ―清長、歌麿、写楽

2011年4月26日（火）▷2011年6月5日（日）
10：00―18：00（毎週金・土曜日は20：00まで）
＊入場受付は閉館の30分前まで
〔休館日〕 会期中無休
〔観覧料〕 一般 1,000（800）円、大学生 700（560）円
＊小・中学生、高校生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
＊（ ）内は前売、団体20名様以上、および市内在住60歳以上の料金
＊前売券は、ローソンチケット（Lコード：36836）、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口（6月25日まで）にて販売。

光を創り出すことが可能となり、作品本来の色を表現することが出来るようになりました。特に紫外線や熱に弱い浮世絵版画には最適な照明器具といえるでしょう。
作品と環境に優しい、新しい照明の下では非「ボストン美術館浮世絵名品展」をお楽しみください。
（LED 照明協力：日本応用光学株式会社／SAMSARA）

義援金箱設置について

東日本大震災にて被災された皆様に心からお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。
当館では、館内に被災された方々への復興支援のため義援金募金箱を設置しております。皆様から寄せられました義援金は、日本赤十字社を通じて、被災地の復興支援に役立てられます。皆様のご支援をお寄せいただけますようお願い申し上げます。
また、館内照明の一部消灯による節電対策を講じてまいりますので、お客様にはご不便をおかけいたしますが、何卒ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 23 年度 所蔵作品展 岡本秋暉とその師友

岡本秋暉と鈴木鷺湖

―所蔵作品展「岡本秋暉とその師友」に関連して―

岡本秋暉(1807～62)は渡辺華山、椿椿山と交際がありました。秋暉も広い意味では江戸時代後期の非常に重要な画家、谷文晁の系統と見るができます。千葉市美術館では同じく文晁の系統に連なる、下総金堀村（現在の船橋市金堀町）出身の鈴木鷺湖(1816～70)について、平成19年(2007)に展覧会を開催したことがあり、今回の展示でも秋暉に次ぐ点数の作品を展示しています。

秋暉と鷺湖の年齢は9歳違い、秋暉は56歳、鷺湖は55歳と似通った年齢で亡くなりました。確認できる最初期の作品は秋暉が天保2年(1831)、鷺湖は天保15年(1844)で、約20年間の共通の活動期があります。小田原藩士とはいえ江戸中屋敷に務め、藩とは関係ない注文も多く受けていた秋暉とやはり江戸を拠点にしていた鷺湖とは、二人とも谷文晁の系統の絵師でもあり、交友関係も重なっていました。

秋暉は弘化3年(1846)頃旧水戸街道に面した柏の寺嶋家に逗留して作品を残しています。当時の寺嶋邸すなわち「摘翠軒」は地域の文化サロンであり、現在の滴水軒記念文化振興財団のルーツとなります。鷺湖も寺嶋家を訪れていました。

幕末に蝦夷地を六度も訪れ、「北海道」の命名者となる松浦武四郎(1818～88)は鷺湖と親しく交わっていました。鷺湖は武四郎が著した『石狩日誌』(万延元年、1860刊)に跋を寄せ、『東蝦夷日誌五編』(明治3年、1870刊)に挿図を描く他、武四郎旧蔵品からも二人の親密な交際を伺うことができます。武四郎は秋暉とも交際がありました。万延元年閏3月と4月に武四郎は秋暉のもとを訪ねています。

福田半香(1804～1864)は遠州見附（現在の静岡県磐田市）の出身で、椿椿山と親しかった画家です。九十九里の網元で自らも絵を描いた斎藤拳石、飯高霞丘との交流があり、鷺湖よりもむしろ半香のほうが現在の千葉県域、上総下総から注文を得ていたようです。とはいえ鷺湖も斎藤滄海(拳石の甥で椿山の門人)とは交際があり、拳石、半香、鷺湖らが一堂に会した席画の寄書扇面が伝わっています。また半香と鷺湖は安政2年(1855)1月11日の太田章山書画会など、書画会で同席することもありました。秋暉も半香との合作が残ります。『衆芳碎珠図』(共生福祉会 福島美術館蔵)は半香、秋暉の他、椿山、山本琴谷、春木南溟、春木南華、佐藤一斎と今回の展示に含まれる人々、その他菊田伊洲、根本愚洲によるもので、全員が同席したかはともかく、交際範囲が重なっていたことが伺えます。「松に飛鶴図屏風」(滴水軒文化振興財団蔵)は秋暉と半香の合作で、構成について両者の間で調整が行われたとみられます。

天保2年の渡辺華山の日記『全樂堂日録』からは秋暉と華山が互いの自宅を訪問して絵について意見交換していることがわかります。

直接の交際は知られないのですが、鷺湖は華山の絵を学んでいました。鷺湖「于公高門図」(千葉市美術館 図)は画中に記す通り華山の絵に倣うものです。この図様は鷺湖だけでなく華山周辺の画人に広まっていました。また鷺湖「両国橋納涼図」(田原市博物館蔵)、鷺湖「黄梁一炊図」(個人蔵、千葉市美術館寄託)は華山の図様によるものです。

当時の人名録や絵師の番付で秋暉と鷺湖の位置づけを見てみましょう。跋文に安政4年(1857)の年記がある「現故漢畫名家集鑒」では、鷺湖は「宗派錯雑」の項、全5段のうちの2段目、秋暉は「無論時代」の頂、全10段の3段目に同じくらしいの字の大きさと載ります。万延2年(1861)「流行諸名家唐紙半切並短冊類價附」では秋暉一朱に対して鷺湖は六匁。しかし改元して同じ年の文久元年の「〔書画価格録〕」では鷺湖が六匁に対して秋暉が五匁。秋暉と鷺湖の評価は同等もしくは秋暉がやや優勢です。秋暉没後の慶応2年(1866)に出た「南宗書畫品價録」では「南北一致」の項に鷺湖、秋暉の順に値段が空欄で並んでいます。南宗といいながらも、北宗を合わせた南北一致、南北合宗と呼ばれたり、また自称したりすること(鷺湖は自称しています)は江戸の文晁系統の画家だけではなく当時の京都の画家にもあり、江戸時代中期以降に盛んになった新しい中国風の絵画「唐画」の変容として考えられる興味深い現象です。

今回の展示は、秋暉の画風のもとになった、中国人画家沈南蘋の画風を伝え、広めた江戸の南蘋派の作品も含め、秋暉、鷺湖二人の画家に注目して江戸時代後期絵画の一面をご紹介します。

〔学芸員 伊藤紫織〕

平成23年度 所蔵作品展 岡本秋暉とその師友展

2011年4月26日（火）▷2011年6月5日（日）
10：00―18：00（毎週金・土曜日は20：00まで）
＊入場受付は閉館の30分前まで
〔休館日〕 会期中無休
〔観覧料〕 一般 200（160）円、大学生 150（120）円
＊小・中学生、高校生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
＊（ ）内は前売、団体30名様以上、および市内在住60歳以上の料金
＊「ボストン美術館浮世絵名品展」に入場された方は無料



新年度を迎え、千葉市では、6つの小学校と2つの中学校が2校ずつ統合され、新たに中学校が1つ開校しました。これ以外にも、児童数の減少に悩む学校もあれば、近隣に大型マンション群が建てられたことにより、校舎の増築が求められるほど子どもの数が増え続けている学校もあります。前年度（2010年）の「千葉アートネットワーク・プロジェクト」では、余裕教室の利活用という問題にアートの視点から切り込んでいきました。アドバイザーに建築家の曾我部昌史さんを迎え、学校の「今」をハード（建物・空間のつくりかた）とソフトの両面から考えていきました。プロジェクトを担う千葉大学の学生・院生たちは、それぞれの関心を持ち寄り、学内の教育学の専門家の方々に取材を重ねました。また、市内の小学校にも協力していただき、学校建築の実情や余裕教室の活用状況についても、限られた数ではありますが、見ることができました。

調査を進めてゆく中で、現在の学校や教育をめぐる課題に取り組むための手がかりとして5つのキーワードが挙げられました。「多元性・多様性」「非日常性」「第三者的存在」「主体性・子どもを子ども扱いしない」「価値の変換」。プロジェクトでは、これらのキーワードを複数組み合わせ、5つの具体的なプラン（「カフェ」「郵便局」「情報センター」「リサイクル工房」「ギャラリー」）をイメージし、アニメーションの手法を使って映像にまとめ、「教室からはじめる」展（2010年11月23日～2011年2月4日 千葉市美術館さや堂ホール／プロジェクトルーム）として発表しました。会期中には、実際に他校で実践されている事例などをうかがう貴重な機会となったトークイベントや、座談会も行われました。

プロジェクトの振り返り作業も大詰めを迎えた頃、東北・東日本地域は大きな震災に見舞われました。震災とその後私たちにもたらされた様々な二次的体験は、少なくともこれまでの価値観を大きく揺さぶり、否定無しに再考を迫るものといえるでしょう。日々被災地の様子を伝える報道の中でも少なからず登場する「学校」は、子どもたちが学び、未来が育まれる場としての本来の姿だけでなく、地域の共同体の拠

所であり、戸建て住居が並ぶ集落の中では文字どおり砦のような存在（避難目標・避難場所としての機能）であり、被災後は避難所として人々の生活の場ともなっています。また、廃校や余裕教室が、困難な状況下において転用可能な空間として現実に活用されてゆく様も目の当たりにし、はからずもこのタイミングでこのようなプロジェクトに取り組みはじめた私たちは、様々なことを考えさせられています。

余裕教室の利活用問題については、今までの様々な取り組みを否定するのでは決してなく、けれどもそこからは出てこないであろうものを別の視点（アートの視点）から提案することを目指しています。さらに言えば、このプロジェクトの本当のねらいは、教室という箱を具体例に「余裕(余り)だった空間」を「価値ある何か、創造的空間」に変換すること自体にあるといえます。身近なもの、日々触れるものの中で、これまでの見方では持て余してしまっているものを、未知の可能性を秘めた資源としてとらえ直すこと。固定された機能から事物や空間を解放し、新しい文脈の中に置いてみる。これらは、これからの成熟社会を生きてゆく私たちにとって必要な作業ではないでしょうか。そうであれば、先に紹介した5つのキーワード「多元性・多様性」「非日常性」「第三者的存在」「主体性」「価値の変換」は、そのまま、進むべき方向を探りあぐねている私たちの社会に、アートを介して与えられるヒントなのかも知れません。

WiCAN2011では、2010年度の活動をふまえて、可能なかたちでのプランの実現化を目指しています。プロジェクトの詳細は、以下のウェブサイトをご覧ください。

「千葉アートネットワーク・プロジェクト」公式サイト
http://www.wican.org/

[学芸員 山根佳奈]



プランごとに制作した模型



プロジェクトルーム
(座談会を終えて)

高校生の観覧料が無料になりました。

2011年度から千葉市美術館では観覧料の一部が変更になり、これまで学生料金だった高校生の観覧料が無料となります。多感な年頃に色々なことに触れ、経験してほしい。そんな思いから実現しました。この機会に美術館へたくさん遊びにきてください。

美術館オリジナルグッズ「写楽キューピー」登場！

みなさん「ご当地キューピー」をご存知ですか？お土産などで人気のある商品ですが、この度千葉市美術館オリジナルのキューピーができました。千葉市美術館の所蔵品の中でも人気の高い東洲斎写楽《三代目大谷鬼次の江戸兵衛》バージョンのキューピーです。写真だけではお伝えしづらいのですが、とても細かいところまで作られています。意外にもキューピーとの相性も良く、とても可愛く仕上がりました。千葉市美術館のミュージアムショップだけでしか手に入りませんので、お見逃しなく。



古きよき千葉市を写したポストカードも販売中です。

2011年に千葉市は市政90年を迎えます。それを記念して、地域の歴史文化勉強会さんが記念ポストカードを制作されました。内容は市政10年後の昭和5年頃と戦後復興期の昭和30年代の建物や街並を写した32種類です。現在は美術館1階のさや堂ホールとなっている旧川崎銀行千葉支店が写っているカードもございます（右写真）。ミュージアムショップにて販売中ですので、ご来館の際は是非お立ち寄り下さい。



ボランティア日和

「鶴のくちばしが緑だ。目の周りも緑できれい」「この目すごいよ。飛び出ているよ」「脚が細かいウロコになっている」「金色の背景はおめでたい時なんだね」とにぎやかに話してくれたのは、「ギッター・コレクション展」（2010年12月14日～2011年1月23日）の鑑賞に来た小学6年生のグループです。私はこのグループの鑑賞リーダーをしながら、このいきいきした言葉の表現に目を見張りました。

鑑賞に選んだ作品は古典的で写実的な丹頂鶴の絵です。子どもたちは関心を持つだろうかと不安がありました。しかし心配は外れ、画面を隅々まで丁寧に観て、いくつもの発見を話してくれました。一人の目では気がつかなかったかもしれないことを三人、四人の目で観ることの面白さを私も小学生たちと体験できました。思えばはじめの私の不安は杞憂だったのでしょうか。一緒に鑑賞した作品は、総金地の画面の中に三羽の丹頂鶴がゆったり描かれている渡辺南岳の《群鶴図》（寛政8年／1796年、二曲一隻屏風、169×181cm）です。

子どもたちがグループで鑑賞する前には、オリエンテーションがあります。その中で「一人で鑑賞する時は二つの目でしか観ることができないが、三人、四人で観たらどうなる？六つや八つの目でいろいろな見方ができるね。」「他の人がどんな感想を言うか、感想を聞いて『そうだろうだ。』とか『あ、そうか。』と別の感じ方や違った見方を感じることができます。」と聞かされ、グループでの力がわかったようです。

さらに「感じたこと、発見したこと、不思議に思ったことなどを恥ずかしがらずに言葉にして表現してみよう。」「とかく人と違ったことを感じたり話したりするときには不安になりがちだけど、伝えることができるのは大事なこと」そんなこともわかったようです。展覧会で子どもたちと一緒に絵と向き合う鑑賞リーダーの役は、時に思いがけない収穫があるんですね。

また、ギッター・コレクション展の最終日には、来館のお客さまに作品に因んだ多色摺り木版画の摺りを楽しんでいただこうと計画したワークショップもありました。熱心に摺りを楽しんでいた若いお父さんに「この絵は会場にありますので、どうぞよかつたら探してみてください」とお声をかけると、笑顔で「今日はもう一度観に来たんですよ」とこちらが嬉しくなるお返事です。ワークショップではお客様も私たちボランティアも手を動かしながら展示作品についての感想などのお話が聞ける楽しみもあります。

「三人寄れば文殊の・・・」と言いますが、美術館大好きボランティアたちも三人寄ればもうミーティング。場所を選ばず、雑談の中でこそ生まれるアイデアに「次は何をやるか？」「今度いつ会える？」「その案はいいねえ、いいねえ」と楽しいひとときです。

多くの方々に美術館をもっと身近に楽しんでもいただけるよう工夫を重ねながら、メンバーそれぞれの持ち味も大切に「美ボラ」活動を楽しんでいきたいと思っています。

[美術館ボランティア 廣瀬由紀]

市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度上期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

[時間] 14:00より(開場は30分前)
[場所] 11階講堂
[定員] 先着150名(入場無料)

第1回	5月21日(土)	「岡本秋暉と花鳥画」 [講師] 伊藤 紫織(当館学芸員)
第2回	6月25日(土)	「橋口五葉が追い求めた女性像」 [講師] 西山 純子(当館学芸員)
第3回	7月16日(土)	「橋口五葉と浮世絵」 [講師] 小林 忠(当館館長)
第4回	8月20日(土)	「昭和陶芸の古典復興」 [講師] 葦科 英也(当館学芸係長)
第5回	9月17日(土)	「棟方志功と民藝運動」 [講師] 西山 純子(当館学芸員)

2011年度 展覧会のご案内

4月26日(火) ■「ボストン美術館浮世絵名品展」
～6月5日(日) 錦絵の黄金時代—清長、歌麿、写楽—
□岡本秋暉とその師友

6月14日(火) ■「生誕130年 橋口五葉展」
～7月31日(日) □ドローイングの楽しみ

8月9日(火) ■「浅川巧生誕120年記念」
～10月2日(日) 浅川伯教・巧兄弟の心と眼—朝鮮時代の美—
□棟方・富本・リーチ近代日本の版画を中心に

10月10日(月・祝) ■「生誕250年記念展」
～11月13日(日) 酒井抱一と江戸琳派の全貌

11月22日(火) ■「瀧口修造とマルセル・デュシャン」
～2012年1月29日(日) □実験工房の作家たち

2012年3月3日(土) ■「第43回市民美術展覧会」
～3月23日(金)

■企画展 □所蔵作品展

千葉市美術館「友の会」会員募集中

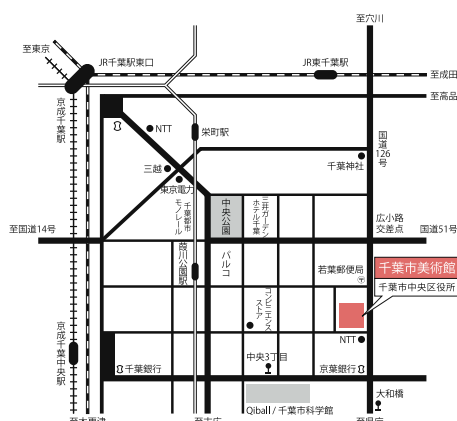
2011年の千葉市美術館も「ボストン美術館浮世絵 錦絵の黄金時代—清長、歌麿、写楽」展をはじめ、充実した展覧会をご用意しております。展覧会が何度でも観覧でき、展覧会図録も一割引で購入できる「友の会」入会が大変お得です。

[会員の特典]

- 会員は、企画展や所蔵作品展を年間、何回でも観覧できます。
- 会員の同伴者(3名様まで)は、団体料金で観覧できます。
- ミュージアムショップで、展覧会図録やグッズを10%引で購入できます。(一部除外あり)
- 展覧会や講演会等の美術館情報をお送りします。
- 会員対象の催しもあります。

	一般会員	学生会員 (大学・専門)	ファミリー会員 (ご家族4名様まで)
入会金	1,000円	500円	2,000円
年会費	2,000円	1,000円	4,000円

入会のお申し込みは美術館受付にて。



[交通案内]

- ◎JR千葉駅東口より
- 徒歩約15分
- 千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- バスのりは7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
- ◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- ◎東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- ◎地下に千葉市中央区役所と共用の駐車場があります

[編集・発行]

千葉市美術館
〒260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chiba 260-8733, Japan
[発行日] 2011年4月25日
[印刷] 株式会社アイベックス



千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

<http://www.ccma-net.jp>

